

8 井上地域の景観

①井上地域の概要

1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領井上組井上村。
明治 22 年(1889)	町村制実施により、緒方村大字井上となる。
昭和 25 年(1950)	町制施行により、緒方町大字井上となる。
平成 17 年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町井上となる。

2 主な出来事

寛文 2 年(1662)	緒方上井手開鑿。
寛文 11 年(1671)	緒方下井手の掘り貫きが完成し通水。
元文 5 年(1740)	熊野権現縁起が熊野社に奉納される。
宝暦 3 年(1753)	原尻奥之丞ほかによる検見願いが行われる。
宝暦 9 年(1759)	原尻奥之丞が強訴を首謀したとして処刑され、万霊地藏塔が建立される。
寛政年間	中ノ原石風呂が造られる。
昭和 7 年(1932)	入田橋竣工。
昭和 18 年(1943)	新嘗祭献穀斎田の御田植式が行われる。
昭和 53 年(1978)	井上の一部で県営圃場整備が行われる。
昭和 59 年(1984)	井上公民館竣工。
平成 17 年(2005)	井上の一部で県営圃場整備が行われる。
平成 24 年(2012)	新嘗祭献穀斎田の御田植式が行われる。

3 井上地域の構成・人口など

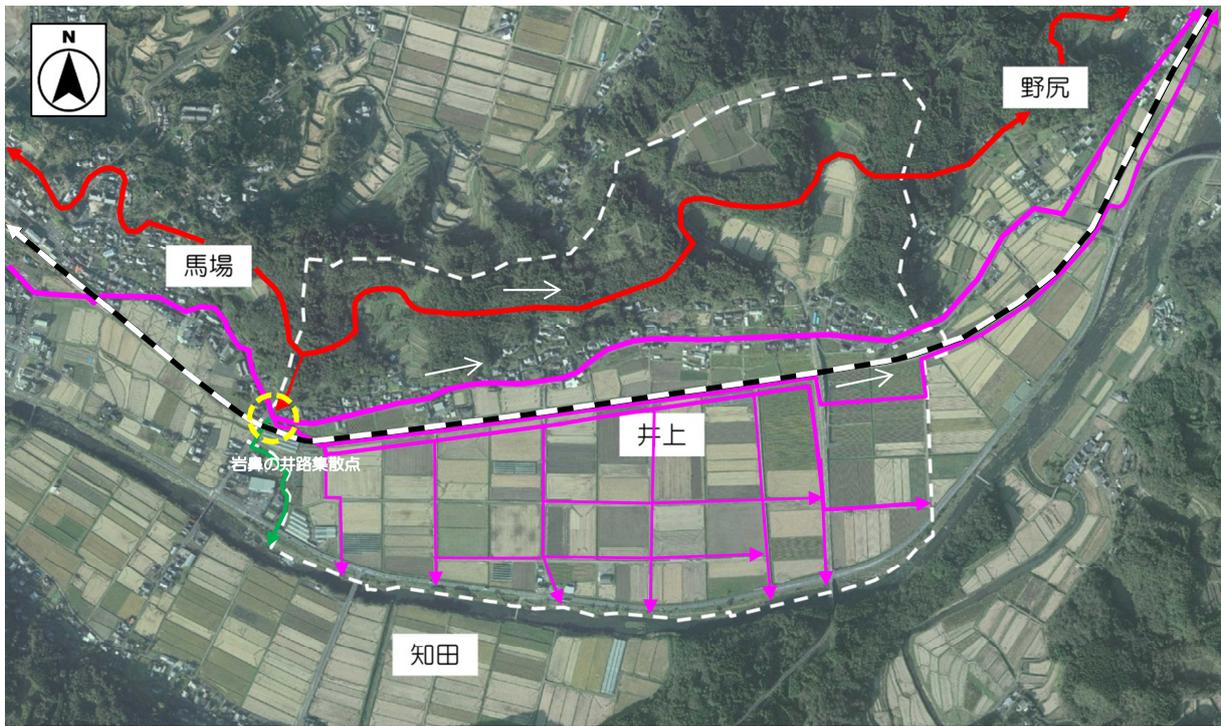
組合名	松手久保、水道口、大福寺、天神山
戸数・人口	69 戸、158 人（令和元年 12 月）

②井上地域を潤す井路と土地利用

井上地域は、緒方町域で最も人口が集中し市街地化した馬場地域の東側に位置する（写真 69）。井上地域の水田は、緒方川から取水する緒方上井路と緒方下井路によって灌漑される。民家は、耕作地を活かすため、北側の山際に東西に横長く分布している（写真 69）。圃場は、約 53ha であり、景観選定予定地域面積のうち約 12.3%を占める。

写真 69 は、圃場整備完了後の空中写真に、緒方上井路の幹線と緒方下井路の幹線・支線を補色したものである。井上地域の圃場は平成 13 年度以降に基盤整備が実施されたため、圃場整備以前の字図（図 54）と比較すると、井路の水廻りが整然となっている。

図 54 は明治 21 年調製の字図であり、宅地（赤色）・畑（黄色）・上井路灌漑水田（ピンク色）・下井路灌漑水田（緑色）と色分けを行った。緒方上井路の幹線と支線は黒色で、緒方下井路の幹線と支線は青色で補色した。これを見ると、下井路の水は、条里型地割（第 3 章 第 2、3 節参照）の形に沿って圃場内に展開していることがわかる。条里型地割の圃場内には宅地がほとんどなく、水田を営むために開発された圃場であることが一目瞭然である。



→ 緒方上井路 → 緒方下井路

写真 69 井上集落の位置

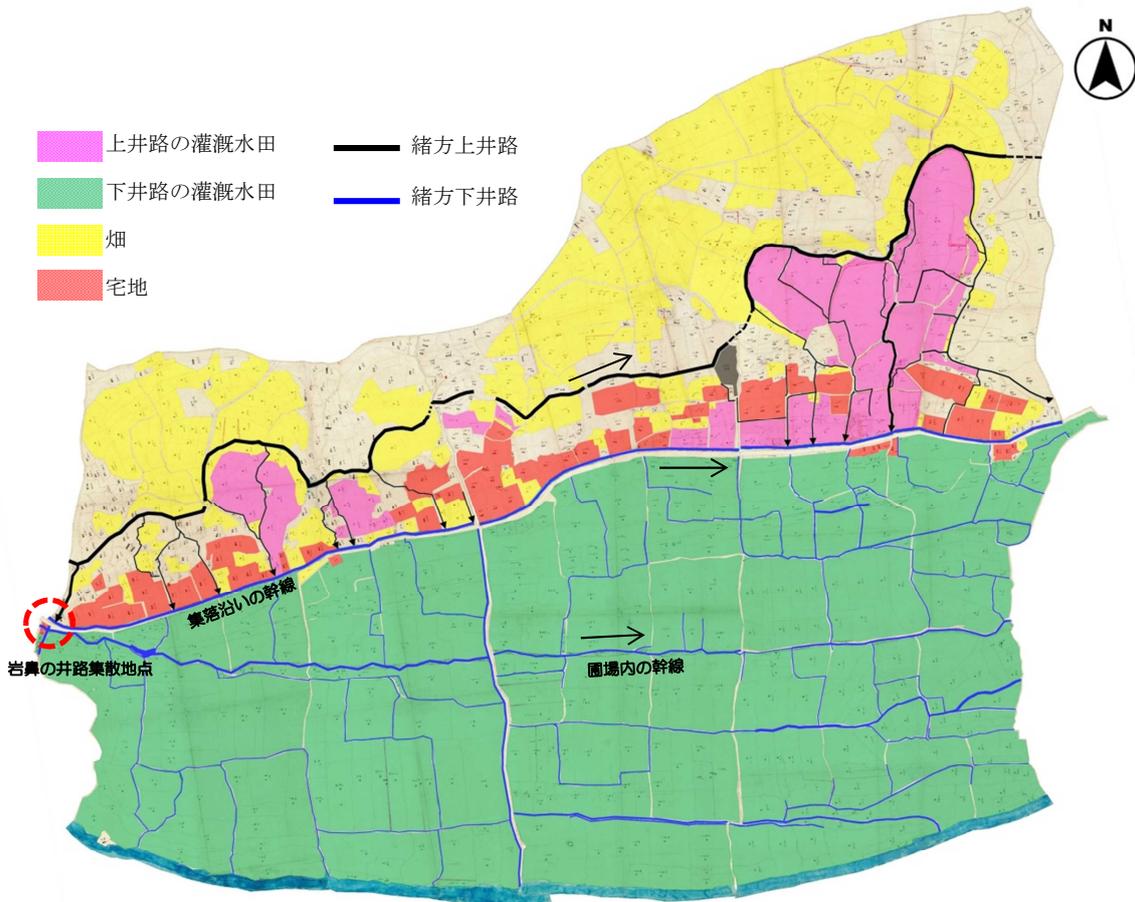


図 54 井上地域の土地利用の色分け (旧字図)

※図面ごとに井路の色分けが異なるのは、背景色との関係で見やすいようにしたためである。

図 55 は現在の地籍図であるが、緒方下井路の南側に若干宅地が増えているが、水田として利用する状況にはほとんど変化がない。図 56 は、令和 2 年現在で水田として利用されている土地に着色したものである。明治 21 年調製の字図（図 54）と比較すると、緒方上井路により灌漑される水田が激減している。緒方上井路は、標高が約 180m の尾根沿いを流れるため、水田へ水を流す「水管理」が非常に大変である。高齢化・後継者不足により、維持管理に手間がかかる棚田地域から水田が荒廃していく状況を示している。

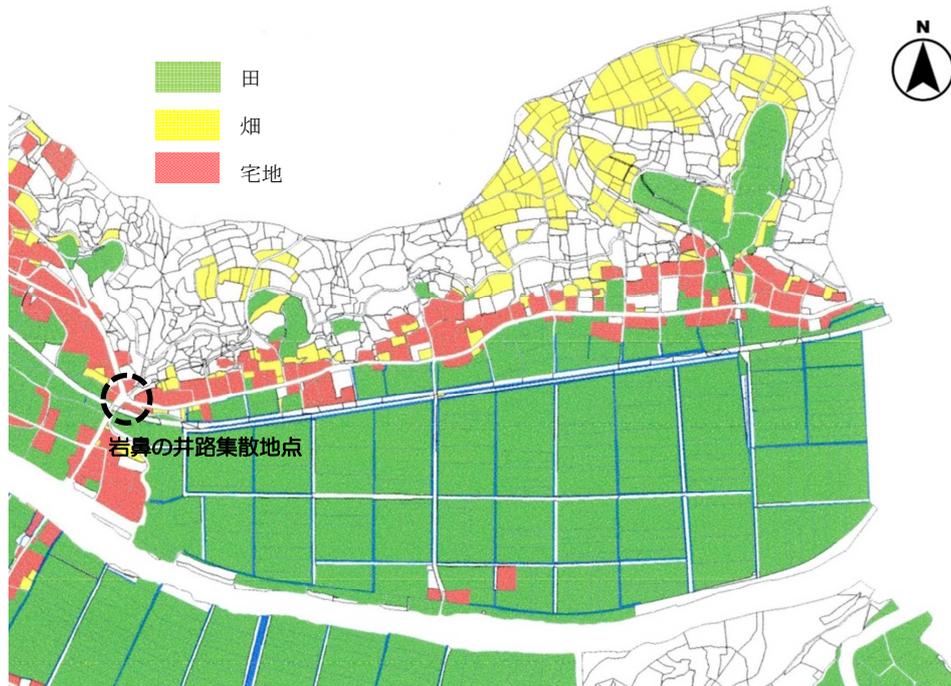


図 55 井上地域の土地利用の色分け（現地籍図）



図 56 井上地域の土地利用の色分け（現地籍図）

③井上地域を潤す緒方上井路と下井路の集散地点

馬場地域と井上地域境に「岩鼻」と呼ばれる所があり、ここは井上地域の圃場を灌漑するのに要といえる場所である。ここでは、緒上井路の水を落水させて、その下に流れる緒方下井路に合流させている（写真 71、72、73）。上井路の標高は約 180m、下井路の合流地点の標高は約 155mであり、25mの落差がある。「岩鼻の集散地点」（写真 73）では、緒方上・下井路の水を集めて、広大な井上地域の圃場を潤す仕組みをつくっているのである。集散地点には緒方上・下井路の大量の水が集まるので、多量の降雨時には緒方川へ放水する放水門が設けられている。この集散地点から下流の緒方下井路は、「集落沿いの幹線」「圃場内の幹線」に分かれ井上地域の圃場を潤している。



写真 70 緒方上井路の落水



写真 71 緒方上・下井路の合流

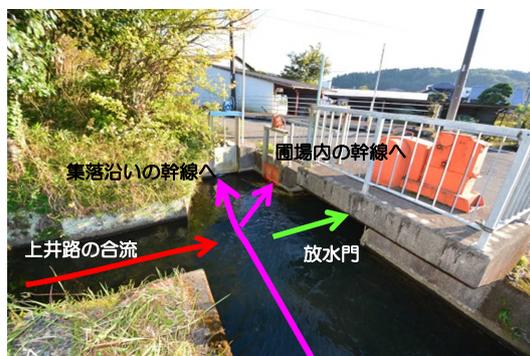


写真 72 上・下井路の集散地点

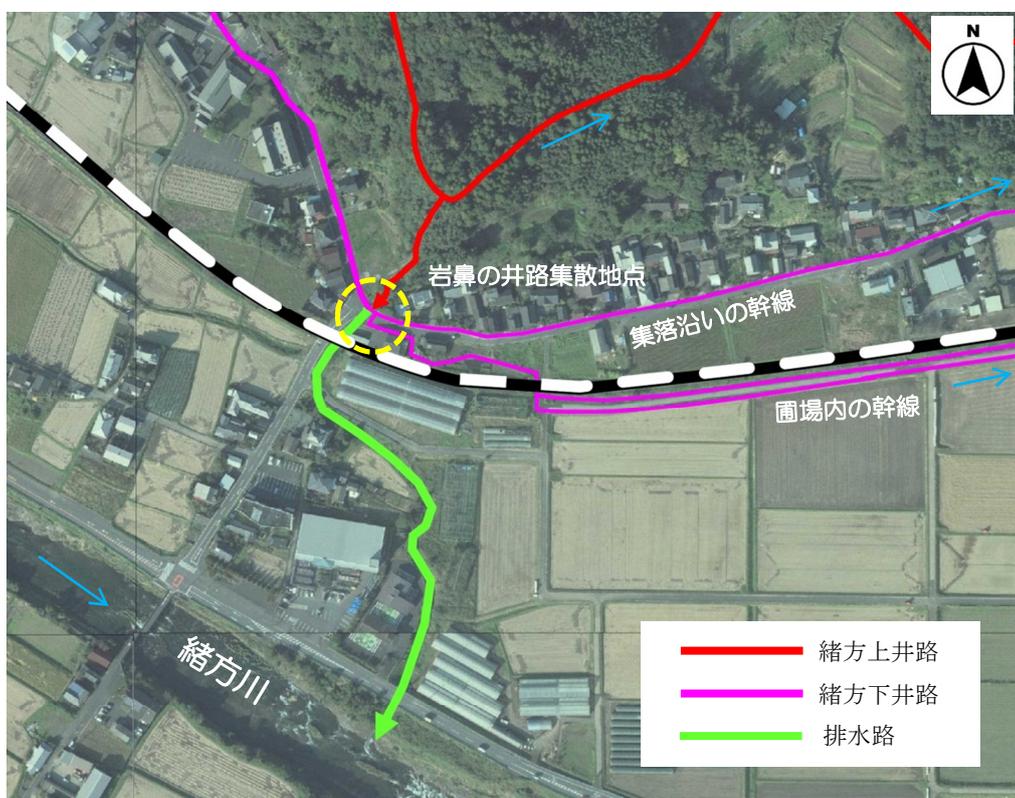


写真 73 上・下井路の集散地点（岩鼻）

④井上地域の断面模式図

図 57 は井上地域の圃場などの断面模式図である。井上地域の圃場は、緒方上井路によって潤される丘陵地帯の棚田（約 5ha）と緒方下井路によって潤される平坦地部分（約 48ha）に分かれる。丘陵地帯の棚田は図 56 の圃場 A 地域であり、井上地域全体のわずか 9% である。緒方上井路が通水した寛文年間以降に水田化したと考えられる。棚田地域であるが、昭和 50 年代に圃場整備が行われ、付近に広域農道が通り農業機械の投入も容易であるため、耕作放棄を免れている（写真 74）。



写真 74 圃場 A（図 56）の棚田

図 56 の圃場 B は、緒方盆地内では最も圃場整備が遅く実施された場所である。他地域よりも大幅に圃場整備が遅れた理由は、圃場が広がったため昭和 50 年代には整備の必要性がなかったからである。近年の大型機械に対応するため、平成 13 年以降に大規模な圃場整備が実施された。

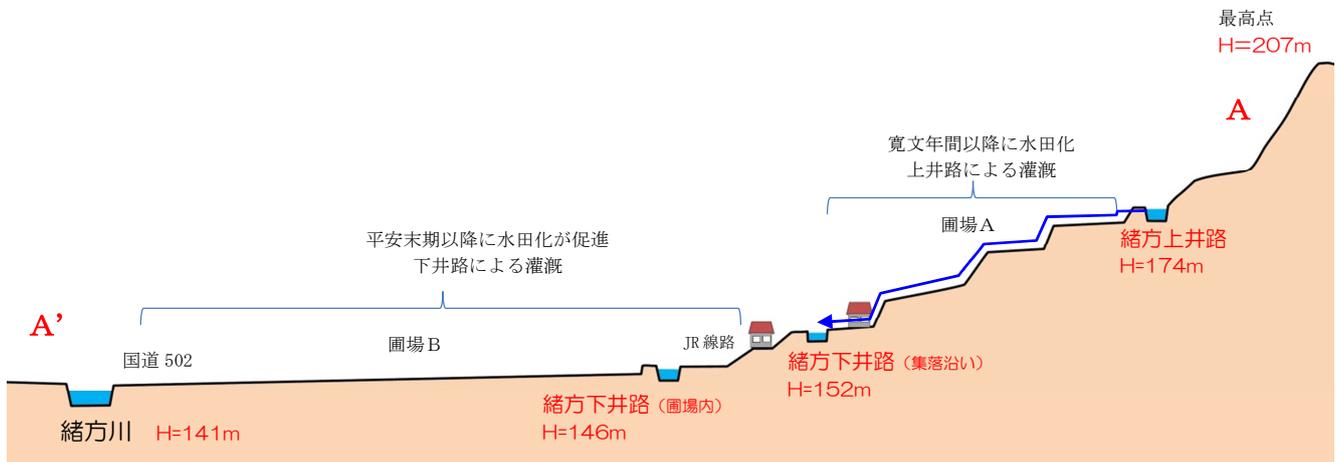


図 57 井上地域の断面模式図（図 56 A—A' 間）

⑤優良な圃場を物語る献穀齋田

井上地域の圃場では、昭和 18 年と平成 24 年に新嘗祭献穀齋田の御田植式が行われている。緒方盆地内で行われたのは井上の圃場だけである。優良な圃場が選ばれ御田植祭が実施された。



写真 75 昭和 18 年 5 月 10 日 種まき



写真 76 昭和 18 年 6 月 19 日 御田植祭



写真 77 昭和 18 年 9 月 25 日 抜穂式



写真 78 昭和 18 年 11 月 23 日 記念撮影



写真 79 平成 24 年 6 月 23 日 御田植祭

⑥井上地域のクンバ（汲ん場）

緒方下井路は、岩鼻の井路集散地点で、集落沿いの幹線と圃場内幹線に分岐する。集落沿いの幹線には、20ヶ所のクンバ（汲ん場＝汲み場）があるが、圃場内幹線には民家はないので汲ん場はない。集落沿いの幹線は、幅は広くなく水深も浅いので、汲ん場の構造も1～3段を掘り込んだものが14ヶ所と多い。敷地から水面まで距離がある汲ん場もあり、4～6段が6ヶ所あった。汲ん場内には、重しとするコンクリートブロックや自然石などが置かれたものが7ヶ所あり、田植時期には苗箱のトレイが重ねられている汲ん場もあった。上自在集落に多く見られるコンクリー



写真 80 井上集落の汲ん場位置図

ト張り出し式の汲ん場は一つもない。井路壁面はコンクリートで補強されており、石垣はほとんど見えない。近年の井路壁面改修工事でも、汲ん場が塞がれることがなく階段も補強された場所が多く、いまだに汲ん場がよく利用されることを示している。



写真 81 苗箱が置かれた汲ん場



写真 82 最も段数がある 6 段の汲ん場

⑦井上地域の景観の構成要素

井上地域には国道 502 号が緒方川沿いを走り、そこから山手側に圃場が広がり、山手には民家が横並びに展開し、更にその北側に里山が緩やかに広がっている。大野川上・中流域の山間部にありながら開放的な農地が広がり、豊かな田園風景を描き出している（写真 83～86）。

写真 85、86 は田植え前の圃場で、一斉に水が張られ水鏡の景観となる。

以下、表 13 に井上地域の景観の構成要素を示す。



写真 83 ホールクroppサイレージ



写真 84 ヒガンバナと圃場・家並



写真 85 圃場内を走る列車



写真 86 田植え前の圃場遠景

表 13 井上地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	岩鼻の井路集散地点		緒方上井路の放水門から緒方下井路への落水地点。広大な井上地域の圃場を潤すため、上井路の水が下井路に合流させられている。
			緒方上・下井路が合流し、そのすぐ下流で井上集落幹線と井上圃場幹線に分岐する。また、多量の降雨時に井路の水を緒方川に排水する放水門も設置されている。
2	井上宝篋印塔 (市指定有形文化財)		金剛院宝篋印塔とも呼ばれる。天文龍集乙未年（1535）に建立された。露盤の文様や月輪に朱色で彩色されている。隅飾突起が小型化している。金剛院は廃寺となり、建物もない。
3	延命地藏		願主吉野孫兵衛ほか村中善男善女が天明7年（1770）に建立したもので、多角形の台座正面には「南無地藏尊」、周囲には由来が刻まれている。平成12年頃は、水道口地藏尊と言われ64人の講が管理していた。圃場整備により、現在地に移転し、延命地藏と呼ばれている。
4	お大師様		弘法大師像。

番号	要素名	写真	説明
5	立像七石地蔵		<p>文化13年の観音坐像の他に、六地蔵が安置されている。地蔵の5体は首が無くなっている。</p>
6	中ノ原石風呂 (県指定有形民俗文化財)		<p>緒方町域には11カ所の石風呂がある。通常は火室と浴室がある2階式で、火室で火を焚き床石を熱して石菖を敷き、蒸気を発生させる方式であるが、中ノ原石風呂は浴室内に水溜があり、そこに焼石を投入して蒸気を発生させる方式である。白杵市の温井にある塩石の石風呂と同様である。</p>
7	大福寺宝篋印塔		<p>塔身の東側に永正6年(1509)、西側に大永7年(1527)の銘が刻まれる。現世安穩後生善処を願い建立された。</p>
8	蓬莱様		<p>蓬莱様と名が付けられた亀の首で、大福寺山門の近くにある。由緒は不詳。庭園に蓬莱島を造り、そこに亀の首を飾る庭園様式の名残かもしれない。越生の瑞光庵にも亀の首が飾られており、瑞光庵の池と大福寺の池が繋がっていたという伝承がある。</p>
9	馬頭観音	 	<p>岡藩主が緒方を訪れたとき、馬に事故があり供養のために建てられたという。大福寺の山門近くにある。「岡城主前大守君御乗馬塚」と台座に書かれている。</p>

番号	要素名	写真	説明
10	三界万霊地藏塔		<p>宝暦3年の強訴を首謀したとして、宝暦9年に処刑された原尻奥之丞を悼む万霊地藏塔。建立者は原尻安之丞。</p>
11	井上社（熊野社）		<p>「熊野社縁起」によると、緒方三郎惟栄が武運長久・子孫繁栄・国家安全を祈願し建立したという。天正14年に豊薩戦争時に兵火にかかり焼失した。元文5年に再興し現在に至る。</p>
12	天神社		<p>麻生一族の神社で、境内には椋の巨木が建っている。また安政二年銘の庚申塔がある。</p>
13	井上地区担い手育成県営圃場整備碑		<p>平成13年から17年にかけて行われた県営圃場整備の記念碑。34.5haの圃場が完備したことが記されている。</p>
14	入田橋碑		<p>昭和7年に架橋された沈下橋の由来を記したもの。井上区民が昭和6年8月17日に架橋の決議をし、10月17日に起工、12月21日に竣工した。</p>

番号	要素名	写真	説明
15	入田橋		入田橋のある場所は江戸時代に日田代官所と宇目郷を結ぶ要路であったという。文久2年の大洪水で落橋以来、土橋などで代用し不便だった。昭和7年に堅牢な沈下橋に架け替えた。現在の橋は、その後また架け替えられた。景観選定範囲の緒方川には、沈下橋が二つあり、そのうちの一つ。
16	不動ヶ淵磨崖仏		緒方川の右岸壁に彫刻された不動明王立像。製作年代は不明。伝説では、子どもの水難が多いので旅の僧が磨崖仏を彫って供養したと言われる。所在地は天神になるが、井上の原尻家が管理してきたので井上で扱う。

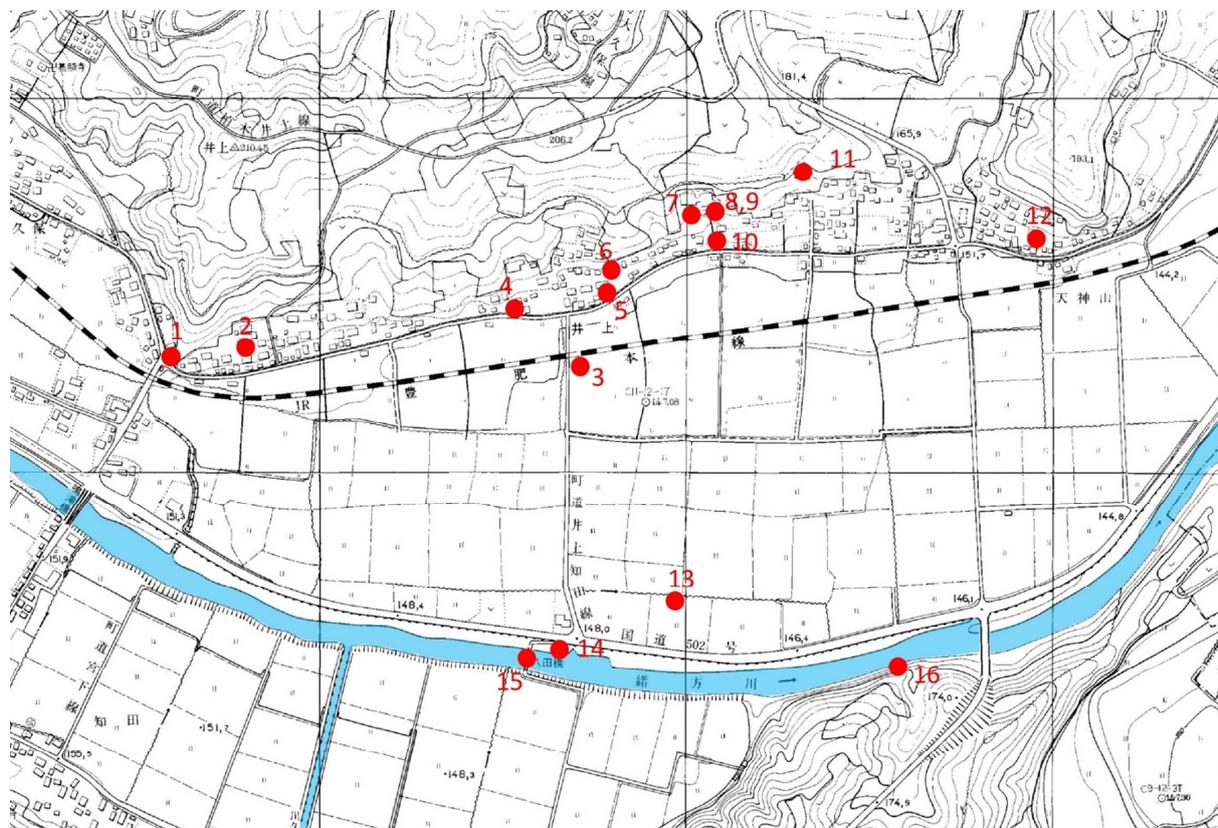


図 58 井上地域の構成要素位置図

9 野尻地域の景観

①野尻集落の概要

1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領牧組野尻村。
明治 22 年(1889)	町村制実施により、緒方村大字野尻となる。
昭和 25 年(1950)	町制施行により、緒方町大字野尻となる。
平成 17 年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町野尻となる。

2 主な出来事

寛文 2 年(1662)	緒方上井手開鑿。
寛文 11 年(1671)	緒方下井手の掘り貫きが完成し通水。
宝暦 3 年(1753)	農民 37 名が検見願いを図るが、大庄屋の説得で中止。
文化 8 年(1811)	一揆で大庄屋が打ち壊しに遭う。
明治 2 年(1869)	一揆で大庄屋が打ち壊しに遭う。
明治 26 年(1893)	緒方川が氾濫し、嶋田・定付の圃場が河原になった。
大正 11 年(1922)	豊肥線鉄道開通。野尻に鉄橋ができた。
大正 13 年(1924)	沈墮発電所堰堤の嵩上げによる災害補償協定締結。
昭和 53 年(1978)	野尻の一部で県営圃場整備竣工。
昭和 54 年(1979)	野尻公民館竣工。
平成 2 年(1990)	定付の圃場が大野川氾濫で埋没。九州電力の災害補償で復旧。
平成 5 年(1993)	台風 13 号により、豊肥線鉄橋が流失。
平成 5 年(1993)	国道 502 号線到新栄橋竣工。
平成 6 年(1994)	豊肥線鉄橋復旧工事完了。

3 野尻集落の構成・人口など

組合名	黒主、西白寺、牧、定付
戸数・人口	47 戸、88 人（令和元年 12 月）

②野尻地域を潤す井路と土地利用

野尻地域は、緒方盆地の最東端にあり、緒方上・下井路の最末流に位置する。野尻地域全体の圃場面積は約 30.3ha であり、景観選定予定地域面積のうち約 7%を占める。

井上の天神山地域と野尻の黒主地域（写真 87）では、昭和 53 年に圃場整備（約 9.5 ha）が実施され、広く良好な農地となっている。黒主地域の東にある共栄橋あたりから北東方向では、圃場が急激に狭くなり、この圃場は主に緒方下井路によって灌漑され、大部分の民家も下井路に沿って立ち並ぶ。

緒方下井路の最末流の定付地域に至ると急に圃場が広くなり、野尻地域で最大の水田地帯となっている。野尻地域の北東端では、大野川本流と緒方川が合流し、そのすぐ下流には九州電力沈墮発電所の堰堤があり、直下には沈墮の滝が形成されている。

野尻集落全体の北側丘陵上には、緒方上井路が開鑿され、野尻地域の棚田を潤している。上井

路の水は、棚田を潤した後、下井路に流れ込む。ここでも、井路の水を無駄にせず、下流にある井路に水を取り込む仕組みがある。

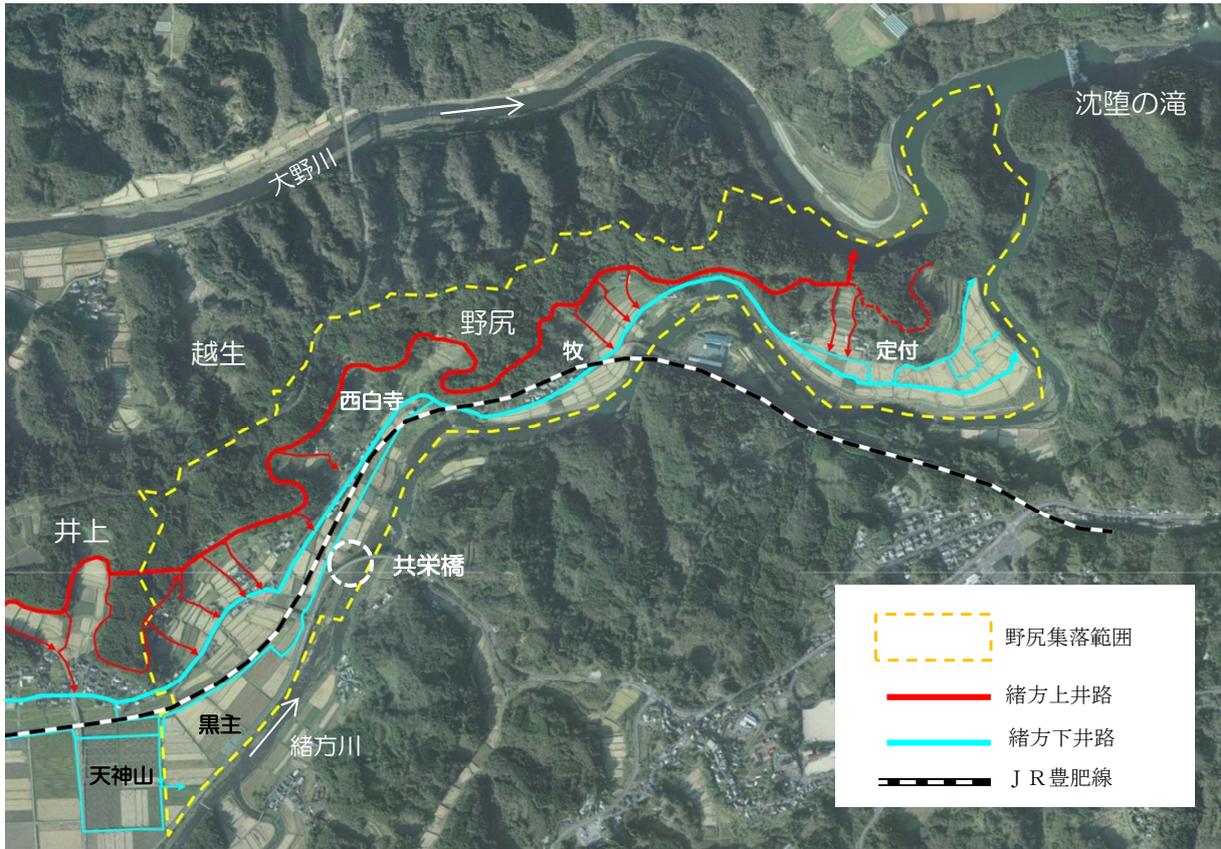


写真 87 野尻集落の位置と緒方上・下井路線図

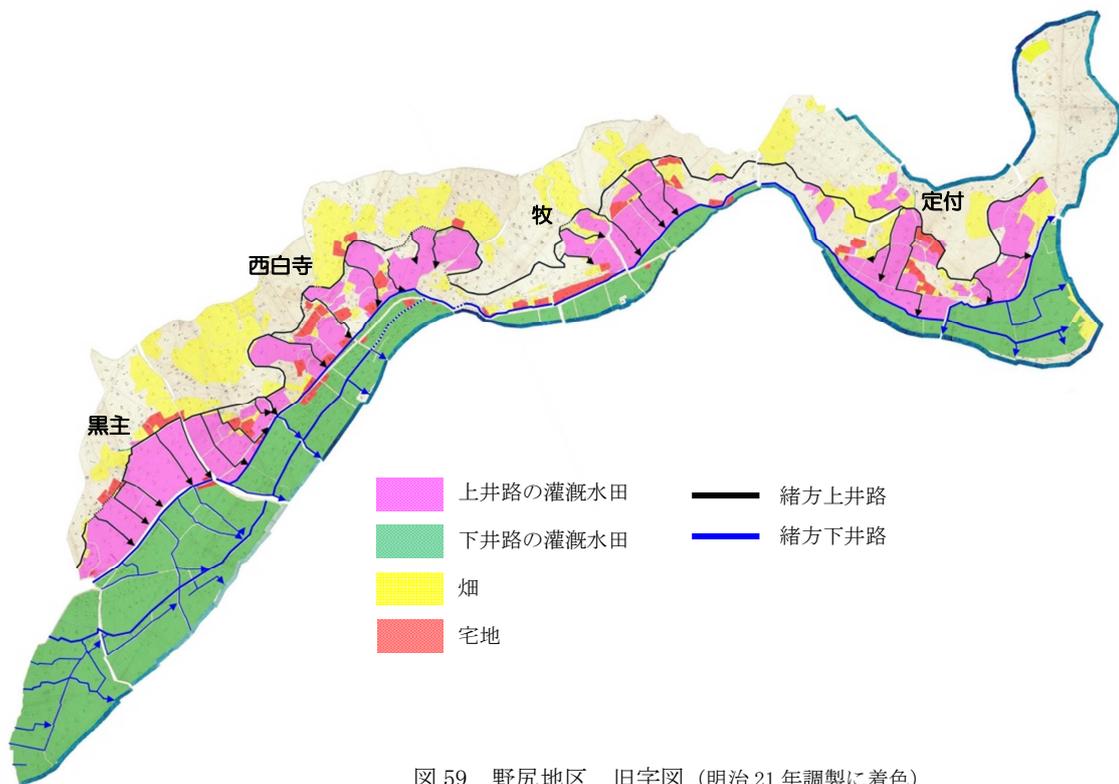


図 59 野尻地区 旧字図 (明治 21 年調製に着色)

図 59 は明治 21 年調製の野尻地域の字図である。緒方上井路（黒色）・緒方下井路（青色）それぞれが潤す圃場を塗り分けた。図 60 は現在の字図に、実際稲作が行われている水田に着色したものである。これを見ると、緒方下井路で灌漑される水田にはほとんど変化がないが、緒方上井路で灌漑される水田（ピンク色）は、明治時代と比較すると大幅に減少していることがわかる。特に、西白寺と定付の減少が著しい。その理由は、棚田の畦畔の除草や丘陵地を流れる緒方上井路の水口（写真 88）まで行くことが、高齢化のために困難になっているからである。これは野尻地域だけではなく、緒方盆地全体に言える問題である。



写真 88 緒方上井路の水口（矢印）

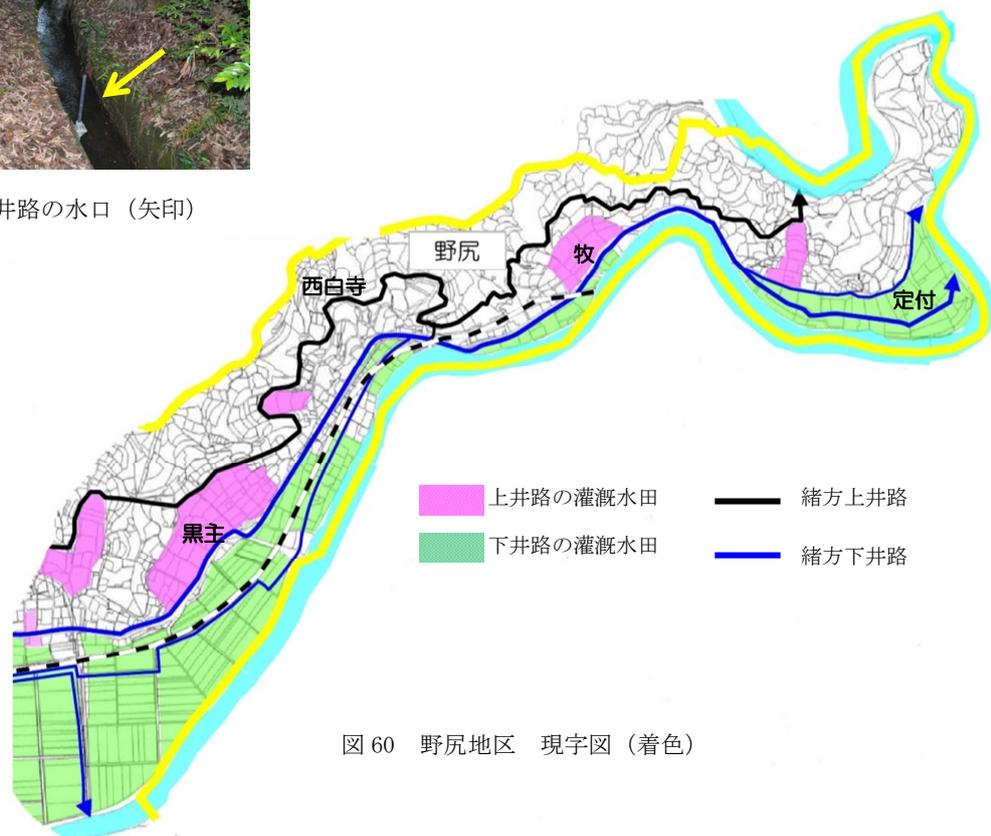


図 60 野尻地区 現字図（着色）



写真 89 下井路に注ぐ上井路からの水



写真 90 減反が進む上井路沿いの水田

③野尻定付地域の圃場

図 61 は野尻の最末流にある定付地域の字図（明治 21 年調製）である。図 62 は現在の字図である。両者を比較すると、緒方上井路によって灌漑される田が大幅に減少していることがわかる。図 62 の赤い破線（黒○部分から）は緒方上井路の最終末の路線であるが、令和 2 年現在では閉鎖されている。薄茶色に着色した圃場（圃場 C）について、耕作を引き受ける者がいなくなったため、野尻の営農団体は緒方井路土地改良区に申し出て、廃線の手続きを行うという。

緒方下井路によって灌漑される部分は緑色に着色した部分である。新旧の字図を比較すると、土地境界線にほとんど変化がない。この土地は圃場整備が実施されておらず、明治 21 年代の圃場の姿を今に伝えており、貴重である。

緒方川と大野川の合流地点のすぐ下流に、九州電力株式会社が沈墮発電所（水力発電）のため取水堰を設けている。野尻自治区では、過去に大量の降雨時に圃場が冠水したことがあり、九州電力と補償協定を結んでいる。平成 2 年の大洪水で圃場が冠水したが、九電の補償で農地の整備が行われている。今後大洪水が発生し冠水した場合、大規模な圃場整備が行われる可能性がある。

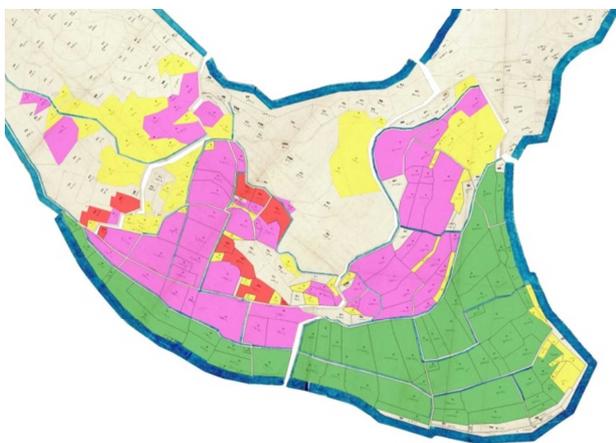


図 61 定付地域の旧字図（明治 21 年）

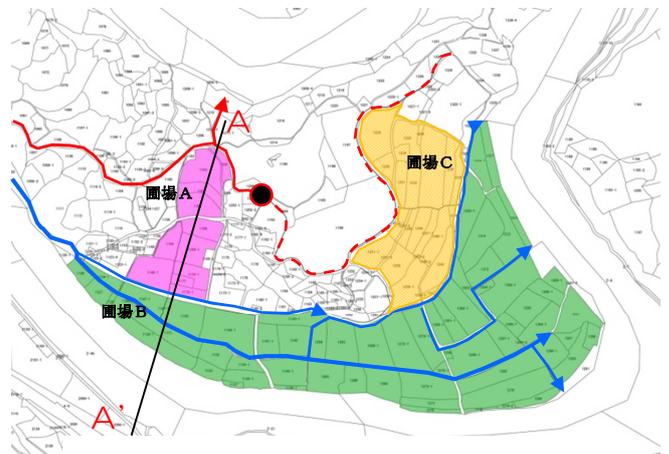


図 62 定付地域の現字図

④野尻地域の断面模式図

図 63 は、野尻のうち定付地域の断面図である。野尻地域は緒方上・下井路が潤す緒方盆地内の最末流にある。井路開鑿も上流域よりも遅れて開鑿されている。『緒方村誌』は「御覧帳細注」を引用し、寛文 11 年(1671)に「馬場村・井上村・野尻村掘貫出来、佐田付（定付）マデ水通ル」と

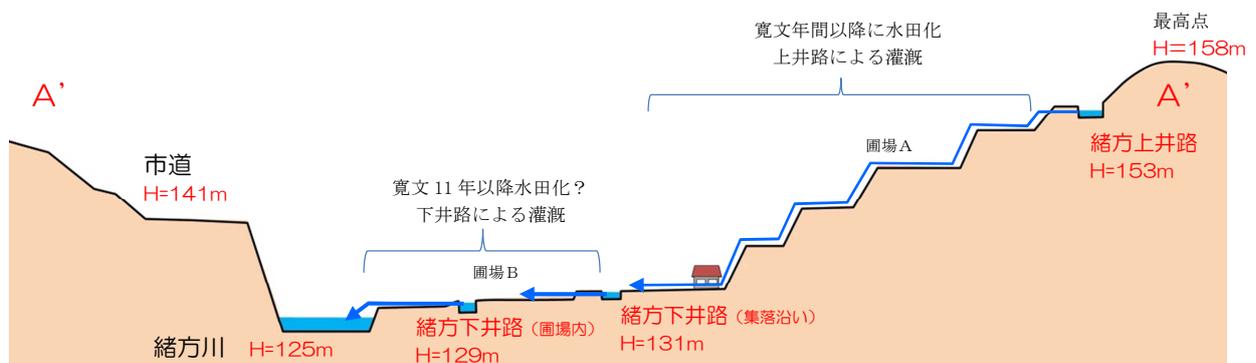


図 63 野尻定付地域の断面図

している。『緒方町誌』では「地方温故集」の「井手・堤出来年暦之事」を引用し、「寛文十一年、佐田付迄水通るとは、下井手の事か」としている。「御覧帳細注」によれば、緒方上井路の完成年は寛文元年とある。緒方町辻の地獄水門にある石割碑には、「緒方庄井懸り上井手の最初は、往古寛文二年より始まり同暦十一亥年、馬場より下掘り次ぎ（以下略）」と記述されている。緒方上井路は、馬場から下流域を寛文11年以降に工事したということであろうか。

これらの記録から、野尻地域の水田景観が成立したのは、緒方上・下井路が完成した寛文11年以降ということになるだろう。

⑤野尻地域のクンバ（汲ん場）

野尻地域の圃場は、緒方上井路と緒方下井路によって潤されている。緒方上井路のクンバ（汲ん場＝汲み場）は2ヶ所。緒方下井路の汲ん場は4ヶ所である（写真91）。下井路の汲ん場の中には6段もの階段を持つものもあるが、井路沿いのほとんどの民家は井路水面まで容易に到達できるため、わざわざ汲ん場を造る必要がなかったようである。

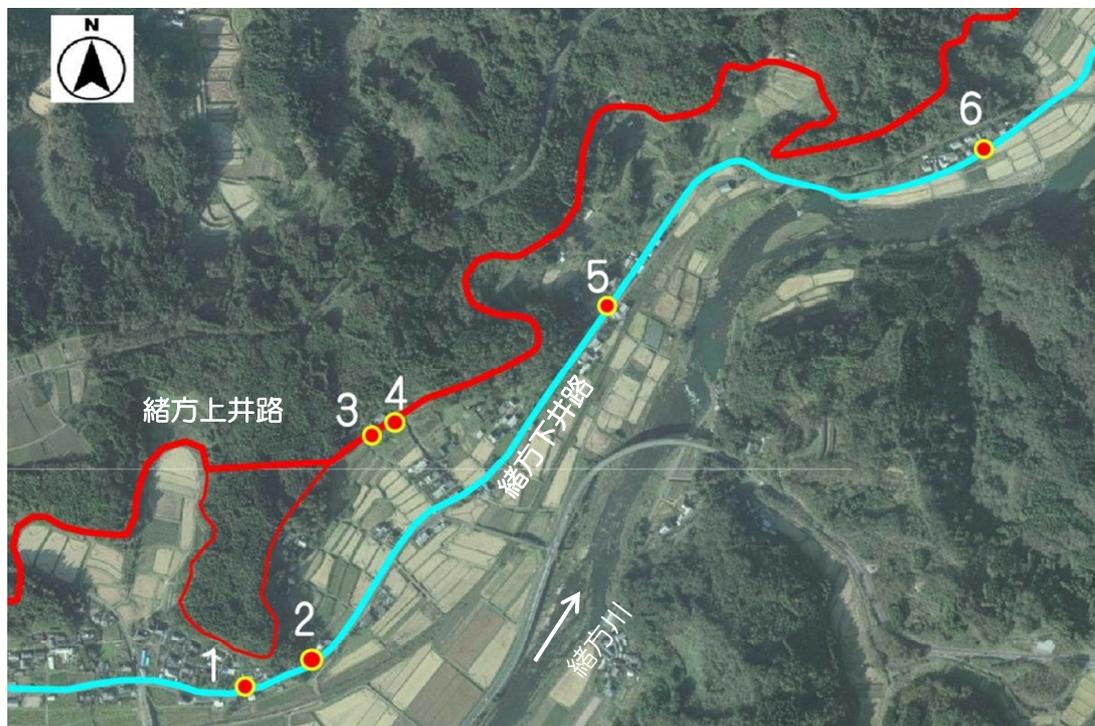


写真91 野尻集落の汲ん場位置図



写真92 緒方上井路の汲ん場 (No.4)



写真93 緒方下井路の汲ん場 (No.5)

⑥野尻地域の景観の構成要素

国道 502 号を清川町方向から下り、新共栄橋に到ると、突然視界が開ける。ここから南方を臨むと、緒方川の流れと遙か彼方に祖母・傾山系が連なっている。眼を転じて橋の上から野尻方向を臨めば、緒方川の河床に刻まれた筋状の侵食風景が珍しい。野尻地域には、井上の天神山地域と隣接する黒主地域の広大な圃場があり、黒主の棚田の上から緒方川方向を臨むと、遠方に祖母・傾山系を眺望できる。また、西白寺・牧・定付地域の棚田から見下ろす緒方川沿いの風景は、まことにのどかで美しい。



写真 94 新共栄橋から祖母・傾山系を臨む



写真 95 新共栄橋から緒方川を臨む

表 14 野尻地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	黒主・天神山圃場整備碑		昭和 52～53 年にかけて、野尻の黒主地区と井上の天神山地区の圃場整備（21ha）が行われた。碑前文の「圃場整備の誌」には、「白熱の討議による明暗交々の経緯の末に、賛同者が大勢を占むるに到り」とあり、整備に到るまでの苦難が見える。碑文は「この土地に生きる人間の生態系を太陽と水と共に維持し、地方文化充実発展の基盤となるよう、この事業を遂行した地権者一同の切なる祈りとする次第である」と結んでいる。
2	民宿まつもと（旧後藤家）の石橋と石塀、建物		緒方上井路に架かる石橋で、数本の桁をまとめた桁橋である。汲ん場・石橋・石塀の眺めが美しい。

番号	写真	説明
2	民宿まつもとの汲ん場と石塀下の井路 	石橋のすぐ横に汲ん場がある。井路の上に桁石を並べて配列し、その上に石垣が築かれている。井路まで敷地が張り出す構造は珍しい。
	民宿まつもとのオトシゴンヤ（落とし小屋） 	落とし小屋は車庫として使用されている。
3	西白寺観世音菩薩 	像高 44 cm の観音菩薩の座像で、南北朝～室町時代（14 世紀下四半期）頃の作と考えられる。元々は西白寺跡の観音堂にあったが、老朽化のため観世音菩薩堂が新築され、そこに安置されている。 西白寺創建の年代は不詳であるが、伝承によれば京都五山東福寺派の禅院であったが、天正年間の豊薩合戦時に焼失したという。
4	西白寺跡宝篋印塔 	西白寺境内にある宝篋印塔で、応永 27 年（1420）の銘がある。また堂内には古位牌があり、「前住成道當寺開山桂芳大和尚」とある。これらから、南北朝から室町初頭の頃、桂芳大和尚が開山し、天正年間の豊薩戦争時に寺が焼かれるまで存続したと推定される。中世の野尻の様子を推察する手がかりとなる。
5	白明社 	明治 18 年（1885）に野尻区のお宮として建立された。祭神は菅原神と崇徳天皇である。9 月の秋分の日に開催される緒方五千石祭に、祭場となる緒方小学校グラウンドまで神輿が御幸する。

番号	要素名	写真	説明
6	小牧城跡		<p>小牧城跡は、大野川と緒方川の合流地点の、舌状の丘陵地帯にある。標高は約160mで、山城は豊薩戦争時に造られたと言われ、堀切、曲輪、切岸などが確認できる。島津軍に一時占領されたが、天正15年2月に大友方の武将志賀親次により奪還されたという。</p>
			<p>小牧城跡の築造想像図。緒方川と大野川が合流した下流には、沈墮の滝が描かれている。豊薩戦争時に、川に逃れ沈墮の滝に落ちた島津兵を、志賀親次は救助し帰国できるよう取り計らったという。 左図は『緒方町誌』より引用。</p>

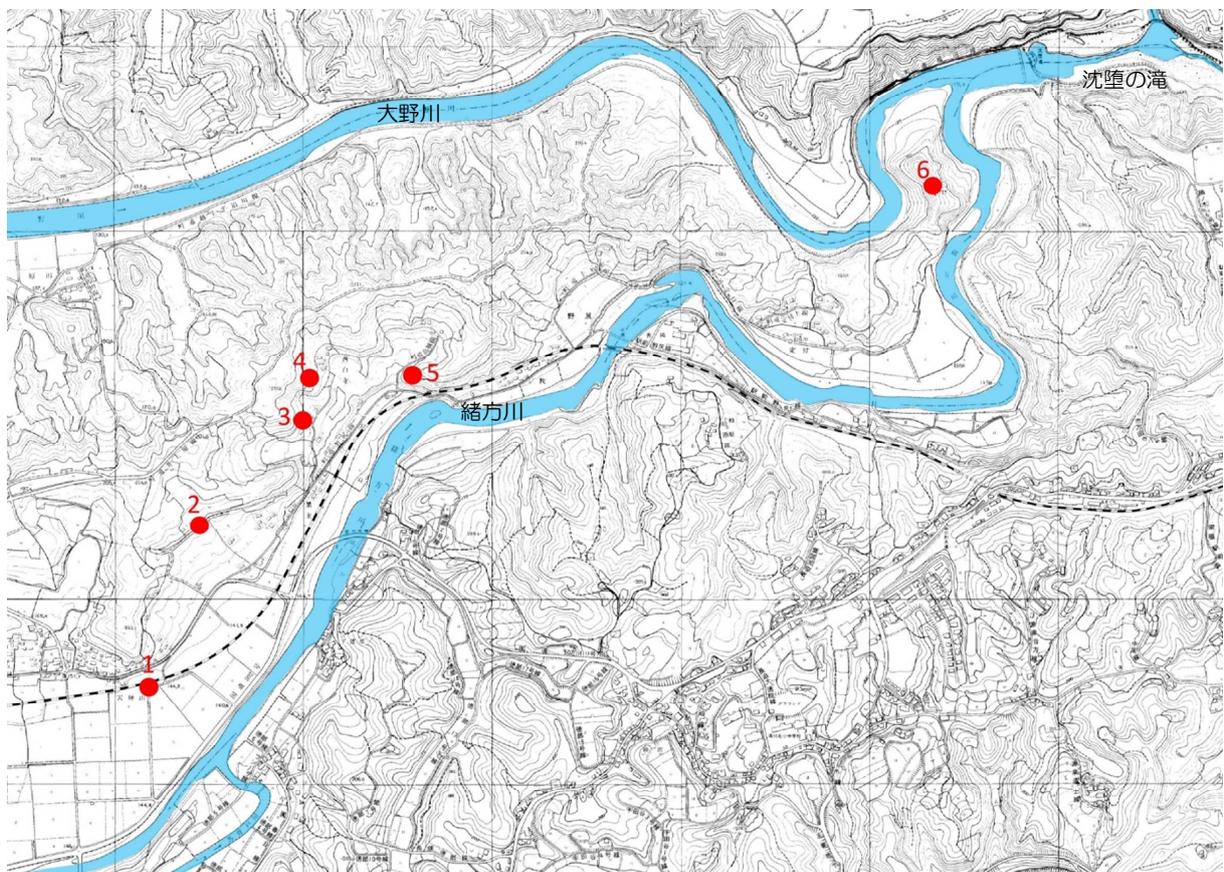


図 64 野尻地域の構成要素位置図